
バッカーノ！1889ー線路の怪物ー

黒屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バックカーノ！1889ー線路の怪物ー

【Nコード】

N9368C

【作者名】

黒屋敷

【あらすじ】

フライング・プッシー・フット号事件より百年前に起きた不可解な事件とレイルトレーサー誕生の秘話

プロローグ（前書き）

バッカーノ！を見て思わず書いてみたくなりました。できるだけ頑張ってみます。

プロローグ

「暇ですね・・・」

そう言ったのは某新聞社（情報屋）のニコラス・ウェインであった。彼は先日起きたフライングブッシーフット号事件以来、これと言った事件も無く、仕事の依頼も一般的な人探し情報の売買しかなく退屈な日々を過ごしていた。

「FPH事件以降、普通すぎる仕事ばかりではないか・・・はあ
退屈ですね」

「そんなに退屈かい？」不満に思うニコラスに不意に声をかけてきたのは天井にまで積まれた書類と本の壁の向こう側にいるとされる人物、情報屋の社長であった。

「ええ 社長はどう思います？」

「君の言うとおり、退屈だよ。こう毎日書類と格闘しているだけの毎日だね」それは退屈ではなく忙しだけなのでは：とニコラスは思うが思い留める。

「ですよね。あゝ何か面白く興味深いネタはないでしょうかねえ」深く溜め息をつき、タバコを吸うニコラスに本棚にいる人物が口を開いた。

「ニコラス君、君はレイチェル君が言った“線路の影をなぞる者”のことをどう思う？」

レイル・トレーサー・・・それは伝説に登場する怪物の名前であった。線路の上を走る列車に向かって後ろから追いかけていき列車の車両と人間を次々に消していき、最後には列車そのものが消えてなくなると言うある地方の伝説となった話である。

「ああ、レイチェルが見た血塗れのヴィーノのことですか。それがどうかしたのですか？」

先日起きた事件の中、黒服と白服の連中を襲った赤い悪魔・葡萄酒「ヴィーノ」ことクレア・スタンフィールドのことをニコラスは思

い出した レイチエルが言うには無差別に黒服と白服の連中だけでなく十歳にも満たない子供まで走る列車の線路の地面で削殺していたと言っていた。しかし それはあくまでクレアが黒服と白服の連中に恐怖を覚えさせるために自らをレイルトレーサーと名乗っただけの話であった。

「結局それはクレアが怪物の名を模倣しただけの話でしょう？」

「いや、そっちの方ではないよ。“本物”のレイル・トレーサーのことだよ」

本物：それはクレアのことではなく真正正銘の怪物のことを言っているのだろうか？

「本物の と言われても：」

「そう。本物なんて存在しないと君は思っているのだろうか？ けどね、伝説というのは時に真実を語ることもあるのだよ」

本棚にいる社長は淡々と話をしてきた。

「さて 暇つぶしに話してあげようか。百年前、突如歴史から姿を消した初代大陸横断列車フライング・ケット・シー号とそこで起きた事件の話を。」

物語は1889年に移る

list 1

1889年 ロンドン

ホワイトチャペル地区。切り裂きジャックの惨劇の恐怖がまだ消えないこの町で、世界初であろうニューヨーク行きの大横断列車
フライング・ケット・シー号が発車の用意していた。

「これで全員ですか？先輩」

「ああ これで全員乗った筈だな」

例によって老人の車掌と見習い車掌がケット・シー号の乗客のリストを確認していた。ちゃんと確認しとかないと上司にどやされてしまうからだ

「さて、わしらも乗るとするか。今日が初めてなんだろう？」

「は、はい！自分、今日初めて列車にやらせてもらいます！よろしくお願いします！」

と老人の車掌に激励をする見習い車掌 無理もない彼にとって今日が初陣だったのだ。

「それじゃ 乗るとするか」

「はいっ！」

こうして彼らは乗り込んだ これから起きる 惨劇も知らずに……
…。

フライング・ケット・シー号の内面構造はとにかく広かった。蒸気機関車でありながら豪華な装飾を施され、車両は全部で十車両あつ

た。各車両については一号車～三号車が一般の乗客たちが乗る食堂車と寢室。四号車～五号車までが当時金で物を言わせている貴族たちが乗る食堂車と寢室。六号車～七号車がワインなどを保存するための車両。そして八号車～十号車が乗客たちの荷物を保管するための貨物車である。

車掌室で今日初めて乗る列車に内部地図を見ながら老人の車掌と見回りをしていた 見習い車掌ことアールは広すぎるケット・シー号の構造に絶句していた。

「うへえ、まさかこんなに広いなんて聞いてないっすよフレッド先輩」

フレッドと呼ばれた老人の車掌も

「わしもだよ 車掌になってから20年こんな馬鹿げた構造をした列車は初めてだよ」

と同意見をしてきた

「はあ…この列車ってどえらい貴族の人が製造会社に無理やり作らせたんですよね？」

「ん？ ああ たしかにそんな風だと聞いたな。表向きは初の大陸横断列車と聞いておるが、なんでも裏ではニューヨークに賭博等を持ち込んで金儲けをするために作ったと聞いたが本当かどうか分からんよ」

アールは一つの仮説を考えた。もしかしてこの列車の貨物室に賭博等で使用する金貨や札束などが大量につまれてるのではないかと

だとしたら

「あゝフレッド先輩俺、貨物室を見てきても……」

「はっはっは アール お前の頭ん中はすべてお見通しじゃ どうせ貨物室に賭博で使用する大金があると考えてるのだろう？」

「え、何のことでしょうか？」

思わず汗を流すアール するとフレッドがニヤニヤと笑みを浮かべ

「お前の考えを説明するなら こうじゃな 『もしかしたら札束の一つや二つをかすめ盗れるんじゃないかな』とな」
アールは苦笑いしながら頭の後ろをかき眩く

「あ、あはは バレちゃいましたか？」

「うむ、今頃の若い連中が考えそうなこったな ただ止めといった方が身のためだぞ」

「え、何ですか？」

フレッドは顎の髭をしゃくりながら言った。

「うむ。何でもな 賭博で使用する大金を守るために、貨物室にガンマンが警護しとるらしいぞ」

「え、ガンマンってマジですか!？」

「うむ…それでも行くというなら止めないが……」

「いや、遠慮します……」
と……

アールがそう言うときフレッドは思わず爆笑していた。

list 2 前編

二人が談話にふけている頃 場所は変わって四号車・貨物室に移る

貨物室

昏い闇の中から何かをさする音が聞こえた。シャツ、シャツ、シヤツと金属類をさする音が……。

ぶつ　ぶあつくしよん！！

突然起きた轟音でかき消された。

「まったく誰か俺様を噂してる奴でもあるのか？」

貨物室にいたのは一風変わった男だった洗濯してなさそうなボロボロのマントにテンガロンハットをまとった古風姿のカウボーイだった。

例によつては愛銃と思われるリボルバーの手入れをしている途中のようだ。

「ま、仕方がないよな 用心棒として有名な俺様なんだ 誰かに噂されたって仕方がないよな」なはははははは！」

間拔けな奇声？もとい笑い声を上げるこの男こそ 何を隠そうフレッドが言っていた大金を警護しているガンマン……………

「このロアビー様がいる限り、この貨物室に手は出させないぜ！な
はははは」

別に誰も貨物室なのに大声で宣言をするロアビーであった。

ロアビーが爆弾宣言をしている頃

四号車の食堂車では貴族たちが賭博を始めていた。

ニューヨークまで到着するには約1日はかかるので暇を持て余した貴族たちは我慢しきれずに賭博を開始したのである。

「それじゃ〜ゲーム開始じゃああ!!」

「イエエーイ!!」

賭博の当事者と思われる老人貴族の合図で他の貴族のギャラリィから歓声が上がリ賭博は始まった。同時に惨劇への序章がスタートすることであった。

list 2 後編

1931 新聞社

「フライング・ケット・シー号……ですか」

社長の話を聞いていたニコラスは頭の中を巡らせた。フライング・ケット・シー号……だめだ！さっぱり分からない！そんなフライング・プッシー・フット号より前の大陸横断列車のことなど私の知る限り存在しない筈だ。

頭を抱えるニコラスに本棚越しの社長が口を開く。

「頭を抱えなくていいよ。知らなくて当然のことだよ。ケット・シー号に関して情報はすべて当事の政府たちの手によって完全に抹消されたのだからね。」

「なっ?!」

政府と言う文字を社長が言った瞬間 ニコラスの頭の中にどよめきが走る。

政府が完全に抹消させるほどの事件がそこで起きたというのかっ
と言うことはやはり……。

「政府がレイルトレーサーの存在を隠したと言うことですか？」

「そういうことになるね」

馬鹿な！有り得ない！怪物が存在したなどと　だが、政府が絡むほどだ、間違いないかも知れない。それに不死者が存在したと言う情報もあった。これは合理的に考えて存在する可能性が高い。

「しかしね、それだけでは無いのだよ。ケット・シー号にはもう一つ隠さなければならぬ事件があったのだよ。」

「ど、どういことですか？レイルトレーサー以外にも何かその列車にあったのですか？」

ニコラスは食い入るように聞く。知りたい、フライング・プッシュ・フット号の前に起きた事件とその真実を……

「ニコラスくん。　君は1888年に起きた連続殺人事件を知っているかい？」

「1888年の連続殺人事件ですか？」

1888年の時代と言えば動乱の暗黒街が立ち並ぶ時代だ　その時代で起きたは殺人事件が数知れない。

「何の事件でしょうか？」

そう言うのと本棚越しの社長から笑い声が聞こえた。

「ニコラスくん 君は 売春婦連続殺人事件を知らないのかね」

「ああ あれですか。あれがどうか……えっ!？」

ニコラスは、はっとした まさか“奴”がいたと言うのか ケット・シー号に！

「社長……まさか？」

「そのまさかだよ ニコラスくん。“彼”が居たのだよ 1888年のロンドンに血の戦慄を与えた切り裂き魔がね……」

1889年 貴族専用食堂車

賭博を開始してから数時間が経った頃

「あっははは たのっし〜！」

一人の貴族の女性がトイレへと通じる廊下をヨタヨタ歩いていた。先ほどの賭博でワインなどを注文しては何杯も他の貴族たちと乾杯を交わし飲みまくっていたので、少しよを足しに來たのである。

「あはは 次は何をして遊ぼうかしらね あ、ゾうだ さっきの髭オヤジのヤツテたルーレットでもやろうかしら あははのは」

相当酔っているであろう。足取りがままならなく途中の壁にぶつかったりしていたが彼女は気にしなかった。そして、ようやくトイレにたどり着くと

「さでど さっざど トイレ すまぜっかあ こんちくちよう！」

そう言ってトイレに扉を開ける。しかし

「あれ？何か暗い？」

通常のトイレとは桁違いに広く豪華なトイレは漆黒の闇に包まれていた。普段は電気がついているはずなのだが……………

「ま、イイヤ 入っちゃえ」

そう言ってトイレに入る　すると…………

ぽたっ……

女性の額に何が水のようなものが当たった。

「ん？　な〜にこれ？　何かヌルい感じ〜」

水を手のひらで見てみるが暗闇でよく見えないのでその水が何なのかは分からなかったが

次の瞬間、

「えっ？」

窓の外の月光が自分を照らした瞬間　その水が何なのか分かった
それは　真っ赤な真っ赤な血だった。

「な、なんなのよ　コレ？」

血を見たせいで一瞬で酔いは覚めた　血が上から降ってきた
？うそでしょ？　女性には恐る恐る天井を見上げた瞬間　女性には氷
付いた。

「あ……ああ……あ」

それは天井にいた真っ赤な血を纏ったナイフを片手に恐ろしい眼光でこちらを睨む 黒い影の怪物が

「いっいやああああ……あが……」

女性が叫ぶが そこまでであった 女性の悲鳴がトイレに響いただけ
けで外には漏らさない 何故なら 女性の首筋が切断され鮮血が、
ぶしゅうううっ、と飛び散ったからだ 女性は一瞬でこれまで人生とともに絶命した。

女性の死を確認すると怪物がカタコトで何かを話す。

「ミナゴロシ……キゾク ゼンブ……コロス……カナラズ」

と黒い影の怪物こと切り裂きジャックは呟く。

list 2 後編（後書き）

うまく書きてませんが よろしくお願いします。

list 3

二号車 寢室

貴族たちが賭博でどんちゃん騒ぎをかましている頃。二号車である計画が開始されようとしていた。

小さな部屋に黒いスーツを着た男たちが10人程度集り沈黙していた。そこにいたのはフライング・ケット・シー号の専属に雇われた給仕たちだった。そして一人の男が沈黙を破った。

「さて、てめえら 計画どおりにやるぞ」

給仕とは思えない暴力的な言葉が飛んだ それに釣られるかのようにほかの給仕たちも、おうなどと呟く。

「わざわざ 給仕たちの格好してまで侵入したんだ その辱められた分だけ 金をぶんどる！ いいか！」

「おお！！」

「よし！ てめえら作戦開始だ！」

そういうと男たちは給仕用のスーツを破り捨て 自分たちの元の服

装が露わになった。褐色のボロボロな服に肩にナイフを加えた狼のエンブレムが刻まれているいかにも悪人の印象的象徴を醸し出していた。

ロンドンにある噂が流れていたことがある。ボロボロな服装をした質の悪い不良集団が時代遅れにも義盗賊団などと語り高級貴族の金を盗みまくった挙げ句。どう言うわけか貧しい人々に金をばらまくという噂が……。

「さて 今宵の月の晩にてコヨーテは吠えるぜ。宝を寄越しな！とな」

コヨーテ…それが奴らの名前だった。

一号車・窓際の席

窓の向こうの夜景色をじっと眺めているのは革のジャケットを羽織り、下にはかまを履いたなんとも不思議な服装をした東洋人だった。腰には武士の魂とも言える刀が鞘に納められている。

もし外国人がみたらこう言うだろう

“サムライ”と。

サムライ男は窓の外を見ながら想う
ニューヨークに行くためにこんな気品の欠片もない強欲めいた装飾をした列車に乗るとは予想もしていなかった。ああ 早く 祖国、

日本に帰りたい。そんなことをぼやいていると

「まだ景色眺めてんのか？」

一人のアメリカ人の男が声をかけてきた歳はだいたい二十歳かそれより一つ下の年齢の男　カッコつけているのか上から黒いダスターコートを着て　ドクロのバンダナを頭に被っている。

「景色だけが取り柄だからな　この列車は」

サムライ男は違和感もなく英語で話す。

「ははっ　それ同感　、この一号車は普通の列車と変わらないのに　貴族専用見た？　もはや王室みたいだったぜ」

「入ったのか？」

「入った…けどすぐにガードマンに捕まって　舞い戻ってきた」

サムライ男は頭をかきながらため息を吐く。

「役立たずだな　せめて、ド偉い貴族方が召し上がって…いや貪ってる豪華食材くらい持ってこいよ」

「むちゃ言うなよ　“タツロー”ガードマンの守備マジで固いんだぜ」

さらにタツローと呼ばれた男はため息を吐き

「“リロイ”　一号車の食事みたる？　ハムパンと麦スープのみだ
それに比べて貴族たちは俺たちが見たこともない豪華料理ばかりだ」

リロイと呼ばれた男も同じくため息を吐く

「ああ　ローストビーフにナポリにペペロンチーノ、極め付きに1
780年もの高級ワインときたもんだ……」

今度は二人思えば二人の出会いが唐突だった。ロンドンならではの霧が道を覆い隠す中、一人は旅行を終え日本に帰国するためにニューヨークに向かう者。一人はニューヨークにいる小説家コナン・ドイルに会い彼と話したいがために向かう者。

そんな目的は違う二人がホワイトチャペル駅に向かう途中、唐突に顔を出くわした。

最初に話しかけてきたのはリロイからだった。

「うお！　サムライか？　！　すっげマジかよ！」

そう言われた五十嵐辰郎は

「お前こそなんだ？海賊か？」

「おお！よく分かったな このバンダナは有名な海賊旗をそのまま写して造られた限定品だぜ」

「いや、全然答えになってないぞ……」

「ま、細かいことは気にすんな！な、」

初対面なのに気安い奴だなあと思っていると

「なあなあ あんたはどこに行くんだ？」

「ニューヨークだが……」

するとバンダナ男は

「あれ、奇遇。実は俺もなんだ ニューヨークにコナン・ドイルがいるって言うからサインもらおうかなと思ってな」

なんと！それだけのために高額料金とも言えるニューヨーク行きの列車に乗るとは しかし まさかとは思うが……

「ニューヨークに行くってことはフライング・ケット・シー号だよな？」

「ああ」

「金あんのか？」

「いんや」

男はあっさり答えた。

「おいおいケット・シー号の切符券がいくらなのか知ってるのか？」

「さあ？ どうせ俺 貨物車に忍び込む予定だし」

無賃乗車かいっ！！ と駅の前で頭を抱えていると不意に列車の汽笛音が鳴った。

「あ、やべっ！ 時間だ 早く行こうぜ」

バンダナ男は気安く手を握り駅に向かって走る

「おい、お前は無理だろ？ つか途中で駅員に捕まるのが落ちだぞそれに何故が一緒に行かなきゃならん？」

それにバンダナ男はニンマリと笑い

「予定変更した お前の付き添いとして乗ることにした」

なっ…

何て勝手な奴なんだ！ つか今さっき知り合ったばかりだが、……
…付き合ってられん

とバンダナ男の手を振り解こうとした

「おいおい 手を解こうとすんなよ 遅れるだろ！」

「五月蠅い！ つか、お前 初対面の奴に普通不正な行いを一緒にや
ると思っているのか？」

「いーじゃん 旅は死場もろともって言うし。」

「いやそれ “死場もろとも” じゃなくて “道連れ” だろ？」

「そ、それぞれ！だから諦めて一緒に来いって！」

いや全然意味が分からんぞ！と言おうとするがバンダナ男はスピードを上げるぞと言い さらに早く突っ走った そして走っている（走らされてる）途中で

「おっと自己紹介がまだだったな 俺はリロイってんだ 名字は無い 孤児だから」

別に聞きたくもない自己紹介を答えてくる

「んで、あんたは？」

自己紹介などするか と思っていたが 自分の性格 武士の心得のせいか、つい口走ってしまった…。

「い、五十嵐辰郎だ」

「タツロー？変な名前だな まあいいや、とにかく行くぜ」

っておい！人の名前を変だとか言うな。由緒正しき家柄なんだぞ、って言うか その前に……！！

「俺を巻き込むなああああああああ……！！」

辰郎の叫びがホワイトチャペルのターミナルに木霊する。もしかしたら世界初となるターミナルで愛？を叫んだ外国人として歴史に名が残るであろう。しかしそれはなかった 何故ならホワイトチャペ

ル駅は近い未来に無くなっているのだから………。

list 3 (後書き)

うまく小説を書きたい！そう思いながら小説を読みまくっている今日この頃です。

list 4

貴族専用食堂車

数時間前に賭博を始めたばかりなのに相変わらず騒がしいパレードは続いていた。ポーカーやスロットが織りなす螺旋の中、喜劇と悲劇を繰り返して、そして豪華なディナーを食しながら そんな中 貴族たちの目が一つのゲームに釘付けになっていた。

「ふ、後悔するぜ、爺さん」

一人は若い二十歳過ぎの貴族

「フォ、フォ、フォ、用意はできましたかな」

もう一人は白い服装の老紳士だった

二人が行っていたのポーカーだった。 ただし普通のポーカーでなく賭博式のポーカーである。

元々は4人いたのだが二人が脱落し最終ゲームが開始していたのだ。このゲームはそれぞれに懸けた金額分のチップを出し、相手の誰かを選択しそれらに勝てば懸けた金額分のチップを手に入れることができる。ちなみに敗退した2人は一万ドルと五千ドルを懸けていた。一万は若い貴族に、五千は老紳士にと。

2人は自分の手札を見つめ準備を整える。若い貴族には自信があった 何故なら自分の手札は中間的強さを持つフルハウスが揃ってい

たからだ。

『勝てる…勝てるぞ これなら勝てる ふふ じじい 覚悟しとけよ これであんたも終わりだよ!』

そして幕は下りた

若い貴族が手札を晒す すると周囲から歓声がわいた。

「さあ 爺さん 次はあんたの番だ 手札を見せな」

「フオ、フオ、フオ、言われなくとも出すよ」

老紳士が手札を晒すすると若い貴族と周囲の貴族たちは驚愕した。

「な、ば…バカなっ」

「フオ、フオ、フオ お前の負けじゃのう お若いの」

老紳士の手札 そこにあったのはすべてエースカード4枚 つまり最強のフォーカードが揃っていたのだ これではさすがのフルハウスでは太刀打ちできず よって老紳士の勝利が確定したのである。

「くっ…クソオオオオオオオオオオオオ!!!」

若い貴族は悔しさと後悔と絶望の三つを同時に叫んだ。

周囲から最高潮の歓声が湧いた瞬間だった。

しばらくすると、金を儲けた老紳士は廊下へ出ていき自分の部屋に戻ろうとした時、後ろの廊下から怒声が湧いた。

「待て！糞ジジイ てめえ イカサマしただろ！そうだろ？出なきゃあんな奇跡なんか起こるわけがねえ！」

顔を真っ赤にして激昂していた先ほど対戦者の若い貴族だった。

やれやれ どうも自分がフォーカードを出したことを疑問に思ったのであろう。どこの貴族もプライドが高い分貪欲な性格をしているからな

老紳士が溜め息をつく。

「言いがかりはよしてくれないか。お若いの あれは間違いなく偶然が起こした奇跡だ それをイカサマなどと言うなど失礼にもほどがあるぞ」

「五月蠅い！俺は納得いかねえぞ！その金は元々俺がもらうはずの金だ！だからほかの二人に負けるようにしたんだからな！」

どうやらこの貴族は勝つことしか脳になく、自分が勝つためなら手段を選ばないタイプらしい つまり……。

「お前さんがイカサマをしてたのではないか。」

「ああ そうだよ！ 勝つための手段だよ 勝つためなら俺はどんな手段も選ばないからな こんな風に……」

若い貴族は懷から拳銃を出し老紳士に銃口を向ける。
なるほど 脅して金を頂くと言う魂胆だろう。だが、まだまだ青いのお…おかげで“計画”が少し速まったではないか。

「分かった チップは渡そう だから撃たんでくれ」

老紳士は床にチップの入った袋を置いた

「最初からそうしてりゃいいんだよ。長生きしたけりゃな」

若い貴族がチップの袋を取ろうとした時

「なあ…若いの、お前さんは（バネ足ジャック）と言う奴を知っておるか？」

不意に老紳士が話かけてきた。

「あ？バネ足？なんだそりゃ 聞かねーな んなアホみたいな奴」

「フオ、フオ、フオアホみたいな奴……それは違うぞ 若いの……」

「……………」

老紳士はまるで子供におとぎ話をするように若い貴族に話し始めた。

「十数年前 ある男がいました。その男は殺人に興味を持ち次第に白装束の服装を纏い 夜な夜な 家に侵入しては女性や子供を殺すこと快楽とし、殺人を楽しんでいました。」

「はあ？ジジイ何言って……」

若い貴族の言葉を見殺して老紳士は話を続ける

「そして、事件続きで腹を立てた警察が男を捕まえようとしていたが無駄だった。男には驚異的な脚力を持つ黄金の両足を持っていたからだ、これのおかげで男はいつも6メートル壁だろうが10メートル壁だろうが余裕で警察を捲き 殺人を楽しむ毎日を過ごしてい

ました。」

「おい、ジジイいい加減しろよ おとぎ話は餓鬼の前でほざいてろよ」

次の瞬間……

「うるせえ！！黙ってろクソ餓鬼！！」

「なっ……！！？」

老紳士とは思えない暴力的な言葉が飛んだ。するとさらに老紳士は暴力的声を吐き出すように話を続ける。

「だがよ！だがよ！だがよおお！！ある貴族様が住まう家に忍び込んだ時だ 俺はその家の餓鬼を殺そうと寝室に行こうとしたら どううよ 貴族たちがライフル銃を構えてて俺の自慢の両足を打ち抜きやがったんだ！！まちがいねえ！あれは俺を“わざと”家に入れてはめて喜んでいやがったのさ！しかも餓鬼もケラケラと笑ってやがったんだぜ！」

若い貴族は後ずさった。こいつはヤバい こいつは老紳士なんかじゃないと考えたからだ 今まで数々の老紳士どもを見てきたがこんな風に狂った奴なんか見たことがなかった。

「両足を失った男はされるがままに貴族どもの遊び道具にされたダーツを投げられたり、粉袋をぶちまけられたり、唾を吐きかけられたり、小便の入ったバケツまで男にぶちまけやがったのさ！そして最終的には谷に落とされたのさ！！」

老紳士は唇に血がにじむまで噛みしめていた。

「だが男は奇跡的な助かった 谷に下に木があってそれがクッション

ンとなってくれたからだ……」

若い貴族が後ずさる中、老紳士はそれに釣られるかのように一歩ずつ前に進んでいき、不気味に話を続ける

「男は地をはいずりながら誓った。いつかあの傲慢でえらぶった貴族の豚どもを皆殺しにしてやるとな……そして数年と言う年月を経て、貴族どもが集まる恰好のテーブルを見つけたのさ！無駄に豪華な装飾を施した　フライング・ケット・シー号と言うあのテーブルがなあ……」

「ち、近づくんじゃないやねえ！化け物……！」
いつの間にか怯えていた若い貴族は老紳士に銃口を向けて威嚇する。
しかし老紳士はびくともしない。

「あゝそういえば、お前さんも貴族じゃったなあ　しかもワシが憎むべき奴らと同じ性格の……」

「く、それ以上　近づいたら……」

「殺すか？それは見物だ　果たしてその位置からどうやって？」

若い貴族が気付くのが遅かった。いつのまにた自分が廊下の非常用ドアの前にいることを……。

「んなの知るかあああああ……！」

絶叫し引き金を引く若い貴族。
殺される。間違はなく俺は殺される。なら先に殺してやるまでだ！
しかし、銃声は鳴らなかった

え、間拔けな声を上げ自分の右手を見るが、そこに右手はなかった、いや血しぶきを上げる右の手首しかなかった。よく見ると床にゴロンと銃を握った自分の右手が落ちていた

「ひ、ひぎゃあああああああ!!」

右手を失ったショックが脳に伝わりものすごい痛みが襲い思わず悲鳴を上げる貴族

見ると老紳士が持っていた杖が細長い両刃剣へと姿を変えていた
どうやら仕込み剣だったらしくそれで貴族の右手を切り落としたらしい

「うぐぐつ クソオ よくもっ!!」

残った左腕で老紳士に向けて拳を突き出した。最後の足掻きとも言える行動だ

しかし彼の行動は無駄になった。老紳士が老人の年齢とは思えない跳躍し、貴族の溝に蹴りを叩き込んできた。それならまだ良かった
蹴りを撃たれた瞬間 突然貴族の体がものすごい勢いで吹っ飛ばされ非常用ドアと一緒に走る列車の外に放り出された。おそらく命はないだろう。

貴族が消えた後、老紳士は笑みを浮かべ狂ったように笑い出す。

「くはははははははははははははははは!! さあ 宴の始まりだ さあ踊ろう 貴族諸君 絶望と復讐の炎に灼かれてな!!」

老紳士：いや、かつて“バネ足ジャック”として恐れられた男が笑う
そして彼は再び舞台に舞い戻る 殺戮の舞台へと

フラスコ（前書き）

投稿遅れてすいません 何分忙しいのでちよくちよくやっています

フラスコ

1870年 とある森

真夜中

ニュージャージー州からそう遠くない山奥。

草木が生い茂る静かな森に小さな洞窟があった。

洞窟からは灯りが漏れていた。

洞窟の中は広く人が住むのに丁度よいスペースがあり。

数々の機材や本などが並び、洞窟が研究室みたいになっていた。そこに一人の老人がとある研究を行っていた。老人の名は錬金術師セラード・クエーツ。かつて、錬金術師たちを乗せて航海をしていた船アドウェナ・アウイス号に乗っていた一人であり、そこで起こした事件の張本人であり、そして永遠の命を持つ“不死者”の一人である。

「今度こそ、成功するか？」

彼は何か薬品のようなものを調合していた。しかしその薬品の色は通常では有り得ない色をしていた。そしてその薬品のようなものを球状のフラスコの中に入れる

ぎちゃ……

薄気味悪い音が響いた。フラスコの中をみると薬品が徐々に形を成してゆき トカゲのような姿になっていた。

ピギャアアア

新しい生命の誕生は素晴らしいとはよくいうがこの生き物だけは別だった。この生き物は生まれてきていけない そんな雰囲気醸し出していた。

フラスコの中のトカゲを見たセラードは

「ふん、また出来損ないか」

つまらない表情をみせた。もうこれで四回目である こんな失敗作を作り出したのは：

セラードはアドウェナ・アウイス号で喰らったグレット・アヴァーロから得た知識を使い とある生物を創ろうとしていた。それは……

「“ホムンクルス”を作り出すにはまだ材料が足りないのだろうか……」

ホムンクルス：錬金術師パラケルススが想像したとされる人造人間。フラスコの中で誕生したとされる小さな小人で人間の禁忌の象徴とも言える存在。それをセラードが創り出そうとしていた。

「やはり、あの男：マイザー・アヴァーロがほかの材料の知識を持っているのか。」

セラードは悔しそうに机を叩く。

「くっ…不死の知識だけでなく 材料さえも奴が握っているのか！」

あの時、先に奴の方を喰らっていればこんなことにはならなかったのかも知れない 過去の自分の失態を今になって後悔することになろうとは……。

セラードが溜め息を吐いた。
その時だった。

洞窟の外から人の怒鳴り声や罵声が聞こえた。

「くっ　もう嗅ぎつけたのか無粋な連中がっ」

セラードは慌てて研究資材と例のフラスコを持ち去り、洞窟の奥へと消える。

洞窟の外には松明を持った数十人の人々がいた。皆　洞窟に向けて罵声を叫ぶ

『出てこい！　魔法使い”火炙りにしてやる！”』

『村に災いを振りまきに来た悪魔め！』

『この化け物があ！』

ほかにも死ね！や殺してやるう！との言葉が響く。

実はこの地区の人々は昔、魔女狩りを行っていた人々の末裔で今でも村に災いをもたらす輩には天罰を下すと言う掟があったのだ。

運悪くセラードはその人々の目に止まりこのように隠れながら研究をしなければならなかった。

別に殺されるのを恐れているから逃げているわけではない。自分是不死なのだから死んでもすぐに生き返る。しかし資料は別だ。万が一燃やされてしまつては今までの苦労が水の泡になるからだ

『火を放て！焼き殺してやれ！』

人々の中心的人物が命令する。それと同時に人々は持っていた松明

を洞窟に向けて投げる。炎はみるみるうちに洞窟の中を包み セラードの残された資材や本などが跡形もなく消えた。

自分が今まで集めた資料を残した洞窟が燃えるところを山奥から見ていたセラードは唇を噛む。

いつも冷静な態度をとっていたセラードだが今回ばかりは怒りを隠せなかった。

「愚か者め わしを怒らせたことを後悔させてやろう」

するとセラードは例のフラスコを持ち移動する。

森の奥に進むといやな臭いが漂っていた常人が嗅いだら確実に鼻が曲がるほどのひどい臭い。セラードが臭いがする方向に向かう。

進んでいくと一つの沼があった しかし それはただの沼ではなかった 沼のあちこちに人間と動物の腐りかけの死体や骨が沼に漂っていた。

“死骸の海”それがこの沼の名前だ。この沼にはアメリカが開拓する際、殺したインディアン族たちの死体や動物の死体などが捨てられていてめったに誰も近付かない呪われた沼である。

セラードは持っていたフラスコを沼に投げた。

「ふふ、“出来損ない”だが 育てようによっては化け物になることは確実だろう はははははは」

不気味に笑うセラード

はたしてこの後なにがおこるのであろうか。

数時間後 セラードが沼を後にした後、フラスコの中にいたトカゲがフラスコを破り沼に漂っていた死体を貪り食っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368c/>

バックカーノ！1889ー線路の怪物ー

2010年10月10日16時12分発行